

《受賞関係》

日本植物学会奨励賞受賞に寄せて



西田 生郎 (生物科学専攻)

nishida@uts2.s.u-tokyo.ac.jp

生物科学専攻・植物生態学研究室の園池公毅助手(35歳)が平成8年度の日本植物学会の奨励賞を受賞されました。園池さんは、東京大学教養学部・基礎科学科の出身で、大学院理学系研究科相関理化学専門課程に進まれ、以来、光合成の光化学系反応中心の研究を続けられてきました。今回の受賞の対象となった研究は、「光化学系Iとその低温光阻害のメカニズム」というものです。

植物が光エネルギーを化学エネルギーに変換できる唯一の生物であることは、よく知られていることですが、この光エネルギー変換に直接たずさわるのが光化学系で、これには2種類存在します。ひとつは、光エネルギーで水を分解し、酸素と膨大な還元力(電子)を生み出す光

化学系IIであり、もう一つは、光化学系で生産された電子のエネルギーを生体内で利用可能な還元力であるNADPHに変換する光化学系Iです。光合成は、エネルギー変換のバランスが重要で、これを乱すような要因に対して阻害をうけ、たとえば強光条件下では電子エネルギー過剰による光阻害をうけます。また、低温は、光合成の光阻害を促進するので、これを低温光阻害と呼びます。低温光阻害は、植物の低温感受性とも関連し、そのメカニズムの解明には、多くの研究者の努力が注がれてきました。その結果、光化学系IIが低温・強光条件下で損傷をうけることが明らかになっています。しかし、園池さんは、自然界でおこる植物の低温傷害は光の弱い明け方にもみられることに注目し、弱光条件下での低温光阻害のメカニズムについて研究した結果、その阻害部位は、光化学系IIではなく光化学系Iであることをつきとめました。このことが、今回の受賞につながる、大きな研究成果ひとつのことは間違いありません。今後の、園池さんの研究の発展が、光合成基礎研究および植物の低温傷害の問題解決に大きく貢献することをお祈りいたします。

《留学生から》

「おもしろい」、「面白い」!!

表 泰 秀 (天文学専攻・修士2年・韓国)

私が日本に来てもう2年が過ぎました。私として日本は初めての外国でした。考えてみると、最初は何にも分からず大変だったと思います。生活のためにも、研究のためにも、一番問題だったのは、何より言語の問題、日本語でした。

ここでは、今まで日本語を勉強しながら感じたことをいくつか述べたいと思います。

韓国人として、日本語は他の外国語に比べると勉強しやすいとされています。その原因として、日本語と韓

国語は文法的に似ているし、同じ漢字文化圏であるからと考えています。そのため、韓国では日本語の「助詞」だけ勉強し、漢字は韓国式で読み取りながら、日本の本を読む人もいます。私も日本に来て始めの頃は、その方法で本や資料から大体の情報を得ることができました。しかし、他の人とのコミュニケーションの場合、特に何かに対して議論する場合とか打ち合わせの場合については、上の方法は全く困る方法でありました。

他の国の外国人も同じだと思いますが、日本語を学ぶ時に一番難しいことは漢字ではないかと思っています。特に